

# SK研究会 東北復興視察研修実施報告書

平成26年5月26日

SK研究会 出口 亮

## ●研修の目的

- 震災から3年、被災した各都市では色々の方向性を打ち出し、防波堤を更に高くするところ、低地を諦め高台を造成するところ、完全に内陸に都心を移すところと様々である。

「我々の住む標準町がもしも被災したら…」

いろいろなタイプの復興状況を視察し、自分たちに置き換えて常にビジョンを持てるよう知識を共有します。また、これまで行けなかった福島県にも足を伸ばし、原発が被災した土地の今を感じ取りたいと考えています。支援事業としてこれまで繋がりを維持している陸前高田市の「こども図書館」に赴き、ハンドベルを寄付し交流を深めると共に職員が少なく修繕に手が回らないことなので、建物外壁の修繕及び塗装も手掛けます。

## ●研修内容

- 日時 平成26年5月22日 ~ 平成26年5月24日
- 参加者 出口亮(出口設備)、遠藤直人(道東土建)、土谷悠介(東盛建設)、田村正範(信和建設)  
北村圭一郎(装美堂)

## ●福島県視察

- 南相馬市飯舘村付近の海岸。奥に見えるのは原町火力発電所。  
津波で破損した旧防波堤の撤去工事が盛んに行われ、大量の瓦礫が山積されている。  
すでに新設工事が進んでいる岩手・宮城両県に比べると、原発事故の影響で復興が遅れていることが解る。



・南相馬市鹿島区を流れる真野川河口付近。

集慈モニュメントを清掃している方のお話を聞いた。

ここから見える海側一体は林が生い茂り、震災前は海が見えなかつたそうだ。



・浪江町郊外。原発事故の影響で未だに帰還困難区域である。

そのため被災したまま手つかずの建物が多く見受けられる。



・浪江町市街。

一般の人は誰もおらず、通行止めのゲートを管理する警備員がゲートを固めている。

街があっても人が住めない地域。

閑散としたたたずまいは見えない恐怖と重なって、原発事故の恐ろしさを静かに物語っているようだ…



## ●岩手県視察及びボランティア

・陸前高田市の仮設こども図書館「ちいさいおうち」にて、修繕及び塗装ボランティアを行いました。

雨どい設置



手摺り修繕



塗装及びコーティング



子供達の様子などお話しを聞きました



子供達が所望しているというハンドベルを会からプレゼントさせて頂きました



・金剛寺より撮影。

被災当時の瓦礫はほぼ撤去され、復興工事が着々と進められている。

平成23年4月13日

平成26年5月23日



・住職が不在であったため奥様にお会いしました。

新築工事が始まると言うことでお酒を奉戴させて頂きました。

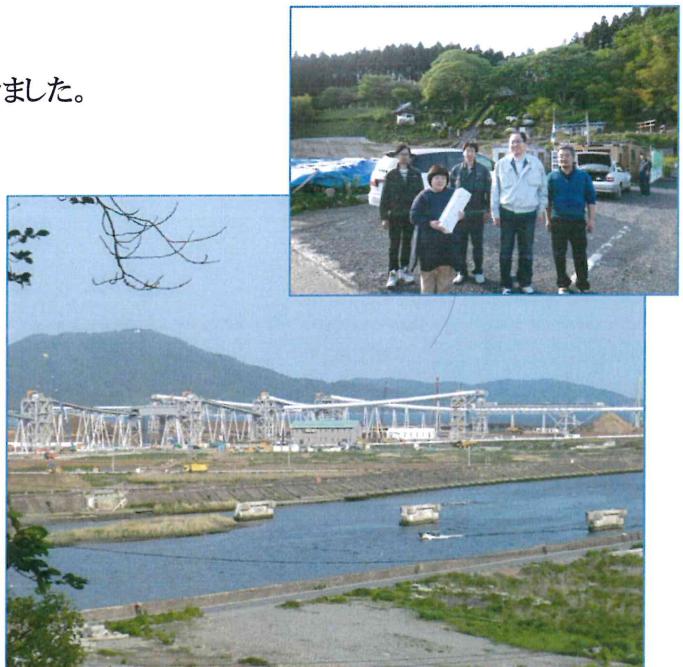
そして、テレビや新聞を賑わしていた陸前高田の

「巨大ベルトコンベア」も見学しました。

とにかくその規模は圧巻で、清水建設

というゼネコンの力と技術を見せつけ

られました。



・短い滞在期間で長距離を移動しつつ視察を行ったので、とても大変でしたが充実した研修となりました。

今回の研修で印象に残ったのは、やはり原発付近とそうでない地域では、復興のスピードに明らかな差があること。

「人がいない」の話を聞けませんでしたが、帰還困難区域にお住まいだった方々の諦めや絶望感が閑散とした街の姿から感じ取れました。

そういう面から、現在標津町が推し進めているソーラーや地熱発電の調査は大変意義ある物と受け止めています。

また、復興工事にも様々なスタイルがあり、陸前高田のように街全体を盛土によって嵩上げしようというものや、

内陸を造成して移住するというもの、はたまた防波堤をさらに嵩上げしてその場に留まろうするものなどなど…

コストや時間、住民の意思などたくさんの問題を抱えたまま着手されている工事が多々あるようです。

そこでSK研究会からの提言ですが、万が一の備えとして我々が被災し復興を成そうとしたときに、事前にある程度の「意思」が存在していたら、と思うのです。

被災してから選択するのではなく、事前に選択肢を絞っておく。これだけでも間違いなく有事の際の復興スピードは増します。是非ご検討頂きたいと思います。